



て、どちらかといえば心や言葉が優先されがちな大人の社会や学校の中で、こうした「からだからの発信」の意味と可能性は高いと思うのです。

ここに子どもがはずんで踊る写真があります。

「はずむ」というテーマを頂いたとき、真っ先にこの写真の小さなダンサーの姿を思い起こしました。

ずいぶん前に撮影したもので、ここに写っている彼女は今はすっかり大人になり、しかも本物のダンサーとして活躍しています。たしか彼女が二歳か三歳の頃のもので。音楽がかかるやいなや、飛び出した彼女は全身でリズムをとり、リズムに合わせて両足でドンドンとたたきつけるように跳びはね始めました。そのはずみは次第に大きくなって、片足で交互に跳びはね、それは自然にスキップになって移動を始めました。移動の中にはターンやジャンプまで加わって、その自由なソロのダンスは音楽が止まるまでよどむことなく続きました。そして、踊って

いる間中、それこそはじけるような笑顔です。からだ全部が笑っているようです。「子どもってすごいなあ、すごい力を持っているんだ」と眼に焼き付いた最初の時でした。

このように小さな子どもは、音楽ひとつで自然に踊り出します。リズムにのってスイングし、全身ははずませ、跳びはねる。何も教えられなくとも、動き方を知らなくても、自由に動き続けます。まさに子どもは皆踊りの天才です。その姿を見れば、「人間は本来踊る存在である」ことに気づかされるはずです。でも、いつから自由からだがはずめなくなるのでしょうか。いつから心がはずめなくなるのでしょうか。いつのまにか踊ることに恥ずかしさやカベをつくってしまった子どもも大人も、その奥底には踊る欲求が眠っているはず。いったんリズムののっけはずんで踊ってみれば、「気がつけば誰だっただンサー」になれるのだから……。



このように、リズムにのっちはずんで踊る楽しさ
は、リズムへの陶醉がもたらす快感、人間が本来的
に持っている「律動の快感」に根ざしており、ここ
に踊りの原点があります。だから、「はずむ」とい
うこと、とりわけ子どもがはずんで踊るという行為
は、人間の身体表現やダンスという行為を教育の面
からずっと追求してきた私にとって、大変重要な
テーマなのです。

ここで、「はずむ」という言葉の意味を挙げてみ
ましょう。広辞苑によれば、「①物に当たる勢いで
はね返る。はね上がる「マリがはずむ」②息づかい
が激しくなる。「息がはずむ、胸がはずむ」③調子
づく。形勢がよくなる。「話がはずむ」「嬉しくて声
がはずむ」④機に乗ずる。つけこむ。⑤思い切っ
てする。⑥思い切って多分に金銭を出す。奮発する。
おごる。「祝儀をはずむ」というように、この言葉
には、単に物がはずむ状態から身体や呼吸そして心

がはずむ状態まで実に様々な意味を含んでいます。
また、「はずむ」が「弾む」の他に「勢む」という
漢字が当てられるように、共通して「勢い」や「調
子」のよい状態を示しています。つまり、内にある
パワーが外に勢いよく現れ出た状態、それが「はず
む」ことなのです。

更に、子どもの好きなスキップという動作は、交
互に片足で跳ねながら走るもので、はずむ動きに移
動が加わったものです。しかもその「タツカ、タツ
カ」というリズムには規則的な拍を破るシンコペー
ションがあつて、その変化が難しいけれど面白いの
です。このようにスキップは、「はずむ」と「走る」
というシンプルな動きからその組み合わせへ、規則
的な拍に合わせることからそれを破るリズムの変化
へと自然に発展した動きととらえられます。この辺
りに子どもを夢中にさせるスキップの秘密があ
るのかもしれませんが、また、子どもがはずみやす



ソではずんでみましょう。自然に笑顔と会話がはずんでくるはず。それが子どもの心とからだの扉を開き、そのパワーは大きな可能性につながりま

す。「はずむ」ことは、子どもの未来を拓くことなのです。

(筑波大学)

はずむ心をつくる身体

鈴木みゆき

「はずむ」という言葉を聞いて、真っ先に思い浮かぶのは、二十年前、長女が保育所で習ってきたある手遊びを披露してくれた時の表情です。こぶしをとんとん打ち鳴らし、メロディとまでは呼べないけれどフレーズを口ずさみ、それはそれはうれしそう

に、目を指したり口を尖らせたり……。ああ、この子の心はずんでいいる！ 娘のその躍動感が、私の中に飛び込んできたような一瞬でした。世の中、何が起ころるか、わかりません。私は娘と一緒に遊ぶ中で、「手遊び」の楽しさを発見し、一緒に作った作